

うはぎなどもおかしうおりしりたるやうに、さうぶのみへがさねのみ木丁のうす物にて、たてわたさせ給へるに、かみをみれば、みすのへりもいとあをやかなるに、のきのあやめもひまなくふかれて、心ことにめでたくおかしきに、御くす玉、玄やうぶの御こしなどもてまいりたるもめづらしうて、わかき人々みけうす、

〔葵花物語八花〕五月〇(寛弘五年中略)五日かみにはひまなくふかれたるあやめも、ことおりににす、おかしうけだかし、

〔讀岐典侍日記〕五月〇(嘉承三年)四日夕つかたに成ぬれば、さうぶいとなみあひたるをみれば、こぞのけふ何事思ひけん、さうぶのこし、朝がれゐのつぼにかきて、殿ごとに人々のぼりて、ひまなくふきしこそ、みづ野のあやめも今日はつきぬらんと見えしか、

〔日本次紀事五月〕五日 端五(今日端菖蒲艾葉於橋間市中家)

〔日本歲時記五月〕四日 國俗今日艾菖蒲を屋ののきに挿む、按するに、歲時記に、五月五日艾をむすびて、人の形のごとくして戸上にかくれば、毒氣をはらふと見えたり、國俗艾菖蒲をのきに挿むも、かゝる遺意なるべし、

〔東都歲事記五月〕五日 端午御祝儀〇(中貴賤佳節を祝す家々軒端に菖蒲蓬をふく)

〔年中行事故實考五月〕四日 禁中にて御殿に菖蒲をぶかせらる、上代は主殿寮これをふきし由、今は小野の郷の百姓まいりてふくなり、人家にて艾菖蒲を軒にさすは、中華艾虎の遺風にて、清少納言が草紙、鴨の長明が無名抄の説によれば、古代よりの風俗にや、陸奥にては菖蒲なきゆへ菰の葉にてふく、西國にて棟の葉を菖蒲にまじへさす、是もまた邪氣を除く本文あるゆへにや、此日をふき籠りの祝といふ、あやめふくゑんによりて、福ともると云意なるべし、

〔年中行事秘抄五月〕四日 菖菖蒲事 新造家必菖之代也 不吉家或菖或不菖〇下